

# わざの臨床教育学

——淡路人形座における人形遣いの稽古および  
興行に関する現象学的記述

2014 年

奥井 遼



## 要約

本研究は、身体を使ったわざの習得場面に立ち会い、そこでの「学び」の過程を記述することによって、「身体による学び」の再構築を試みるものである。

近年教育学において、暗記や計算を重ねることで獲得されるような「情報」としての知識に対して、わざや勘といった「身体で学ぶ」知識への関心が高まっている。学校教育に対して「知識偏重」の批判が長く突きつけられてきたことに鑑みるならば、「身体で学ぶ」知識とその伝承・習熟の原理の究明は、知的作業を優位に置く今日の状況から脱却するための有効な手がかりとなる。

だが、その追求は未だ、近代教育学を支えてきた「表象主義」からの脱却を遂げる段階には至っていない。「表象主義」とは、学ぶべき知識を、あらかじめ情報化・記号化して、個人から個人へと一方向的に伝えるかのように捉える学習観である。こうした見方のもとでは、教え手は機械的に伝えるだけの人、学び手は機械的に受けとるだけの人、という静態的な捉え方から逃れることができず、関係そのものの変化や、彼らの主体的な工夫を見落すことになる。「身体による学び」を原理的に解明する研究は、「頭で覚える」か「身体で覚える」という二元的区別を指摘するだけではなく、「表象主義」的な学習観を根本的に脱却する方向へと向かうべきである。

他方、哲学者メルロ=ポンティが『知覚の現象学』などで論じ、続く研究者が明らかにしつつあるように、人は日常的なコミュニケーション場面において、相方向的で、未だ明確な意図を持たない、それでいて関係構造に大きく寄与する身体的行為のやり取りに身をさらしている。教育の場面においても、教え手と学び手との間に、ミクロなやり取りが働くのであれば、その背景的な働きこそ、教育的事象を成り立たせている土壌と見なせるのではないであろうか。

そうした現象学的な問いかけを引き継ぎ、本研究では、2009年度より淡路人形座（兵庫県南あわじ市、人形浄瑠璃の一座）の人形遣いを対象として通算68回のフィールド調査を行い、わざを遂行する場面の観察を試み、その詳細な分析を行ってきた。淡路人形座とは、遅くとも16世紀中頃までに成立した人形芝居の座元を由来とし、20世紀に入ってから存亡の危機に耐え、今なお人形浄瑠璃の興行を続けている人形座である。調査を重ねるうちに、彼らが日ごろ濃密に交わっている身体的やり取りが、舞台の成就のみならず、わざの習熟を左右する場として機能していることを推測するようになった。そうした微細なやり取りこそ、「わざ」という明示的論点の陰に隠れていた、身体の背景的な働きであり、学びについて再考するための根本原理になるように思われた。

そこで本研究では、彼らの稽古場面に立ち会って、そのわざが獲得されていくプロセスを、当事者たちの身体的なやり取りを明らかにすることによって記述していく。

本研究は、第Ⅰ部「稽古」、および第Ⅱ部「興行」の二つに分けられる。

第Ⅰ部の課題は、稽古に参加している人たちのミクロなやり取りを、彼らの身体の働きに着目しながら記述することである。人形遣いのわざにおいては、一つの動きを作り上げるまでの試行錯誤のプロセスが極めて長い。自分一人の身体を動かすのではなく、人形という新たな身体の動きを共同的に作り上げる必要があるために、そのわざは、いわゆる専門家の技能の習熟といった事象に加えて、複数の身体の連携の中で磨き上げられていく。その際、日常生活であればコミュニケーションの前提とされているささいな身ぶりが、人形を動かすための合図として注目されることもしばしばある。人形遣い同士が動きを制御し合うしぐさそのものが、人形の振り付けに組み込まれていたりもする。つまり、わざを遂行しながら、彼らの身体は、背景化したり焦点化したり、一つの場面のなかで多様な働きを見せるのである。しかもそうしたやり取りは、第三者から丸見えである。身ぶりも言葉も駆使した冗長なやり取りが豊かに息づくなかで、複数の身体による共同的な学びが進行しているという現場は、身体による学びに関する議論に新たな側面を切り開くことになるのではないだろうか。

そうした問題意識から、第Ⅰ部では稽古場面の記述を行なう。

第二章では、人形遣いたちの稽古場面を二つ取り上げ、稽古の円滑な相互行為を支える身体の働きを記述する。方法として、彼らの身体の動きの時間的な連鎖をイラスト化し、その影響関係の推移を細かく追いかけていくことを試みる。ここで取り上げるのは、新人が足の遣い方を教わる場面、および頭遣いと左遣いがわざを調整する場面である。いずれの場面も、やり取りそのものは比較的円滑に進み、簡素な言葉だけで成り立っているように見える。しかしながら、その場面に飛び交っている身体的な意味の網の目は極めて濃密であり、人形遣いとして必要な、相手の動作に敏感であり続ける感性が発揮され合っている。その中で、人形の振りを実現させるために彼らの身体は背景化していくが、その働きによって稽古のやり取りが濃密に行なわれていることが明らかにされる。

第三章では、足遣いがわざの習得に苦勞する場面を取り上げ、「身体図式の崩壊」、「アドバイスの交錯」、「知識の出現」など、彼らの身体的なやり取りが相方向的かつ偶然的に、すなわちおぼつかない歩みを辿っていることを明らかにする。初心者の不慣れた動きに引き摺り下ろされて、上級者が混乱し、彼自身がわざについての認識を更新するといった事態が取り上げられる。わざを教えるということは、相方向的かつ偶然的なものであることが明らかになると同時に、そこでやり取りされるべき知識は、極めて脆弱な成り立ちをしていることが明らかになるだろう。ここでは、彼らのやり取りをイラスト化することに加

えて、そこで交わされている会話を文字化することによって、彼らの身体に生じている出来事を記述することを試みる。

第四章では、頭遣いがわざの習得に手間取る場面を取り上げ、身ぶりと言葉がワンセットになった稽古のやり取りを記述する。彼らの言葉の使い方をつぶさに観察するならば、それは身ぶりを伴うきわめて曖昧なものである場合もあれば、動作の獲得を促すような分析的な明瞭さを発揮する場合もある。ここでは、身体と言葉とが、必ずしも二元的ではない仕方で、稽古場面全体を駆動していることが明らかになるであろう。そのやり取りを丁寧に読み解くことによって、稽古場面全体で生起している重層的な学びのありようを記述していく。

以上の三章を受けて、第Ⅰ部のまとめを行う。第Ⅰ部で試みたのは、身体の暗黙的な働きを起点とした、わざの稽古場面における見えないダイナミズムを把握することである。身体の暗黙的な働きは、個人の身体的能力を開発することだけを目指す「個体能力論」的な学習観や、「頭で考える」ことに対して「身体で覚える」ことの「重要性」を強調する「身体論」的な学習観の陰で、必ずしも関心が注がれてこなかった事象である。それを把握することは、表象主義的な学習観を乗り越え、教え手と学び手との双方が、わざの伝承を通じて変容し合うような共同作業としての学びを模索するという、教育学における大きな挑戦に向けた小さな端緒となるのである。身ぶりと言葉とが不可分に結びついた「学び」の行為空間こそ、これまで十分に掬いとられてこなかった、背景的で雄弁な意味のやり取りの現場であり、そこに立ち返ることによって、「学び」を根本的に見直すための糸口が見出せるのである。

第Ⅱ部では興行場面を取り上げる。本研究が対象にしているのは「わざ」であるが、一口に「わざ」といっても、それはリストアップされているとか記録されているとかいったものではなく、どちらかといえば形式化・体系化を免れるものである。わざは、公演の外題や舞台の位置づけ、人形を遣う人の組み合わせによってその都度発揮され直すものであり、また身体と身体とのやり取りによって師匠から伝えられてきたのであるから、常に変化に晒されてもいる。そうしたわざの広がりをも明らかにするためには、稽古場面だけに特化することはもちろん、「公演」や「実演」、あるいは「実践」という、舞台上での振る舞いだけに焦点化していても十分ではないと考えた。そこで本研究では、公演そのものの位置づけに対する座員たちの姿勢、あるいは公演準備を含めた、わざが積みあがっていくまでのプロセスそのものを包括し、わざを使いこなしていく身体のありようを総合的に捉えることを目標とした。二つ目の課題を「興行」と名づけたのは、人形遣いたちのわざの諸相を、舞台を（文字通り）組み立てていく段階から捉えることを企図したためである。

そうしたところに目を向けたとき、実に驚くべき多様な状況が、彼らにわざの変化ある

いは保存を促していることが分かる。「社会の流れ」という遠いものから、「目の前の観客」という近いものまで、わざを遂行することの現場には、様々な状況がたえず錯綜している。根本的な制約として、彼らは「伝統芸能」として、特定のコードを「保存」しなければならない使命も抱えている。かといって、能や民俗芸能のような厳密な保存を強いられるわけでもない。だからといって大衆演劇として売り出すことも許されない、という緊張関係が、彼らのわざに平衡状態を作り出すのである。第Ⅱ部では、淡路人形座におけるわざを継承しながら演じる身体に着目することによって、彼らを取り巻く外部の何ものかを明らかにし、そうした状況や文脈と駆け引きしているような、彼らの等身大の活動を照らし出していく。

第五章では、淡路人形芝居の来歴と近年の取り組みを明らかにすることによって、文献考証および聞き取りを中心として、わざを継承するという営みに彩りを与えている文脈を明らかにしていく。まず、淡路人形芝居の発端となった、室町時代から江戸時代、明治時代にかけて興隆していた淡路の人形座の来歴を概観し、大正から昭和にかけての衰退と保存運動を取り上げ、淡路人形座創設のいきさつを検討する。それらをふまえ、今日の淡路人形座においてひととき重要な意味を持つ「神事」、「三番叟」と「戎舞」の再演について、および、今日の人形遣いたちにとっての亡き師匠との関わりについて焦点を当てる。これらは、淡路人形座にとって時代のなかでの生き残りとして、伝統的な芸能の継承をかけた、矛盾を孕んだ相克の取り組みであり、彼らが身を投じているわざに、厚みをもたらす背景となるであろう。

第六章では、淡路人形座が近年力を入れている「復活公演」に焦点を定め、稽古場面そのものを埋め込んでいる「文脈」との相克を、より具体的に記述していく。「復活公演」とは、すでに伝承が途絶えた演目を、外部の専門家と共同的に、古い写真や床本、ときには映像を手がかりにして再演出、再上演しようという試みである。そうした公演を題材として、舞台の成立過程、部分稽古、総稽古までの道のりを記述することによって、彼らがいかにして「淡路らしさ」と対峙し、また創出しようとしているのかを明らかにする。「淡路らしさ」に向かう「復活公演」の行程は、「昔の淡路」という理念を追いかけつつ、「文楽」や「阿波」の芸風との距離や、「人形の大きさ」という物質的な制限、あるいは「舞台の進行」などの臨場的なものに揺り動かされながら形成されていく。

第七章では、日本各地の小中学校に出向いて人形体験のワークショップを行う「出張公演」の事例を取り上げる。学校教育と伝統芸能は、必ずしも相性のよいものではないと考えられるが、座員たちはあえて身体を用いた豊かなやり取りを仕掛け、子どもたちの人形体験を生き生きしたものに導いている。その際、座員たちは公演を「現代の巡業」として、今日の重要な取り組みの一つと位置づけており、「体験授業」を期待する学校側の思惑とは

異なる次元で動いている。つまり彼らは、江戸時代に全国を行脚した旅芸人の末裔として、全国の学校に出向いて舞台を披露するという今日的な活動を、かつての「巡業」と重ねあわせているのである。その活動は、定められた時間の枠組みの中での「授業」を求める学校に、異質な身体をもち込み、学校的な時間の秩序をいったん破壊し、そこに舞台の空間を創造していく試みでもある。

以上の三章を受けて、第Ⅱ部のまとめを行う。第Ⅱ部で試みたのは、興行場面において、わざを使いこなしていく身体を読み解くことで、彼らが身につけるべきわざが、固有の状況のなかでのミクロな破壊と生成の渦中にあることを明らかにすることである。淡路人形座におけるわざの実演は、「伝統の継承」という素朴な捉え方では把握し得ない、積極的に近代社会に迎合した活動である。そこで実践されているわざは、伝統を商品化して価値を生み出す商業性と、人形を遣うことの身体感覚によって得られる求道性という二つの矛盾に裏打ちされており、その矛盾が彼らの活動を豊かに彩っている。彼らの活動は、「淡路らしさ」や「伝統芸能」といった言説と緊張関係を取り結ぶ、等身大の相克であり、その試行錯誤のなかで、今日に息づく身体性が浮き彫りになってくるのである。

そうしたわざの変容の過程は、観念的なやり取りとして達成されるわけではなく、まさに身体と身体とが影響し合って生じてくる。わざは、長い時間をかけて少しずつ定着していくものであり、一旦定着すればそこから逃れることが困難となる。そうした学びのありようは、淡路人形座が背負ってきた時間、幼い頃の「じいさんばあさんがたむろしていた人形会館の、壁に人形が並んである恐ろしさ」や、「初めて師匠の演技を見たときの驚き」、「通常公演ばかりの退屈さ」といった時間から逃れられるものではない。また、「徳島に帰省するために必ず立ち寄る港」、「中学校を卒業して働いていた造船所」、「昔人形座があった場所」、「みんなが淡路弁をしゃべる環境」といった、その土地にしかない固有性から逃れられるものでもない。そうしたものを背負うことこそ、あえて言うならば「身体による学び」にほかならない。

終章では総括として、本研究が、身体に関する教育学の関心にいかなる展望を与えるのかを呈示していく。表象主義的な学びのあり方を乗り越えるための展望は、それを真っ向から否定して新たな教育理論を打ち立てることではなく、それを留保し、ミクロな身体の働きに関する記述を重ねることで、内側から食い破るという仕方で見いだすことができる。当事者たちの身体的なやり取りを見だし、そこを起点とすることによって、学びの再構築へと向かう道が開かれるのである。